

## (2) 製塩土器について

富山県内における土器製塩の成立と展開については、岸本雅敏氏による研究が注目される〔岸本 1983〕。以下に、その成果を引用し、対比させながら、本遺跡の性格を考えてみる。

道下遺跡から出土した製塩土器は小さな破片が主体を占め、全体の形状を復原しうる個体はない。しかし、口縁部及び底部の破片からその形状を考えると、平底で体部が除々に外反して開いていくバケツ形を呈するといえる。このような平底製塩土器は現在のところ富山県内の東部地域に分布がみられる。じょうべのま遺跡〔岸本・山本 1982〕と朝日町境金剛遺跡〔岡上 1979〕について、本例が県内で3例目となる。器壁の厚さは1.0~1.5cmと厚く、他遺跡と共通している。じょうべのま遺跡では内外面に接合痕とともにハケメ調整が部分的にみられる。本遺跡でもハケメ調整は観察されるが、その破片は少ない。境金剛遺跡でも本遺跡と同様に、ハケメ調整の割合は低い。所属時期は、じょうべのま遺跡が9世紀、境金剛遺跡が9世紀から10世紀にかけてであり、本遺跡は10世紀後半に属する。富山県東部地域では平安時代初頭から中葉にかけて、一貫して前述のような特徴をもつ平底製塩土器が使用されていたといえる。

道下遺跡は現在の海岸線から約2キロメートルの平野部に所在する。前述したようにこの地域は日本海側有数の海岸浸食地帯であり、往時の海岸線はさらに沖合に求めなければならない。立地条件について岸本氏の研究成果に照らすと、地理的には「県東部の日本海沿岸地帯に分布する一群」に含まれ、「沿岸型」に該当する。一方、海岸線からの距離を考慮すると「内陸型」に区分される。「沿岸型」の遺跡は海浜から数百メートル離れた地域をも含んでおり、「土器製塩の行なわれた蓋然性のきわめて高い地域」であるのに対して、「内陸型」は「塩の供給 消費地」とされている。地理的にみる限り本遺跡は「中間型」とでも呼ぶべき位置にあり、その性格を論ずるのは難しい。

石川県寺家遺跡では奈良・平安時代の製塩土器に器種のバラエティーがみられる〔小嶋 1981〕。岸本氏はこの多様性を煎熬容器と焼塩容器が「大型平底製塩土器の出現を契機として（中略）別個の土器または容器にあるていど分化した」ための結果と評価している。10世紀の年代が与えられる本遺跡の製塩土器は平底のものに限定されており、器種のバラエティーはみられない。岸本氏が指摘するように、平底製塩土器を煎熬容器として限定するならば、本遺跡は塩生産との強い関与が考えられる。

以上の問題点を整理し、本遺跡の製塩土器の性格を評価すると以下の相反する2点にまとめることができる。

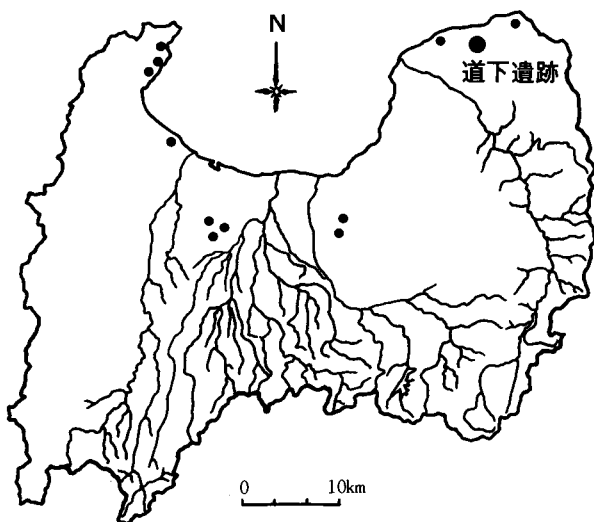
1. 地理的には「沿岸型」に含まれる「中間型」であり、遺跡の近辺、すなわち海岸よりで土器製塩が行なわれた。

道下遺跡はその居住集落であり、生産された塩がこの場所に運びこまれた。

2. 「県東部の沿岸地帯に分布する一群」に含まれる

ものの土器製塩は行なわれず、「内陸型」の消費地的性格をもつ集落である。この場合、平底製塩土器がそのまま運搬容器としてもたらされたことになる。

道下遺跡に存在した10世紀の集落は、社会的背景を考慮する必要があるものの、主に農業生産に生活基盤が求められる。一般的に遺跡の立地条件の中で最も強い要因は生産基盤であるから、本遺跡の場合、副次的な要因と考える塩生産のために集落の位置を設定するとは考えがたい。よって、現汀線から2キロメートルという距離をもって塩生産における消費集落と性格づけするよりも、塩生産の「出作」的な方式を採用した集落と考えるのが妥当といえる。(松島)



製塩土器の分布〔岸本1983に加筆〕